

B：宮城県コース

匿名希望

現地を訪問して思うこと

京都で地方公務員として働く私は、東日本大震災が発生してからのち、自分にできることは何かを問い続けてきました。職場では、災害発生の数時間後から、被災地へのさまざまな物資の輸送や職員の派遣等が行われてきました。それは今も続いており、現在も15人の職員が仙台市をはじめ12の自治体で仕事をしています。また、被災者の皆さんの京都への受け入れも行ってきました。そういう状況の中、私には被災自治体から求められているスキルがなく、現地への派遣に手を挙げることもできず、また、今後も派遣されることはない見通しです。かといって、自力でボランティアに行く体力も伝手もなく、人としても公務員としても役に立たないなあという気持ちを持ってきました。

今回の校友会の取り組みは、そのような思いの中で、現地の状況を直に学ぶことができる機会として応募しましたが、実際に訪問して感じたことは、まず、まちが静かで、そして整然としていることでした。

それは、もともとの様子を知らないためか、1年7か月という時間の経過なのかわかりません。津波で失われた建物は跡形もなく、雑草が茂り、広大な空き地になっていて、ガレキでさえも、車は車、船は船と分類され整然と積み上げられている。ガレキの周りは囲われていて中が見えない。何事もなかったと言われれば「そうか」と思ってしまうかもしれない。そういう状況でした。

また、校友の木村長努氏(石巻市在住)のお話では、復興予算の約半分が未執行であるという報道に対して、「インフラをはじめとした基盤整備ができていない中で、マンパワーも不足し、予算を使えといわれても無理がある。」また、復興の進展率や経費のかかり方が、自治体によって差がある。ということをお聞きし、目の前の出来事の復興は確かに進んでいるのですが、中長期の都市計画やまちのあり方、人々の将来の暮らしを見据えた復興という意味では、課題がまだまだ山積しているのだと感じるとともに、基礎自治体の職員としての役割を痛感しました。

「そのために、私には何ができるのか!」京都で同様の災害が起こった時に、何をすればいいのか。まだまだ自問を続けていくことになりそうです。

今回の機会を得させていただいたことに、心から感謝申し上げますとともに、いつも心を被災地に寄せることを心がけようと思っております。現地校友の皆様をはじめ、関係者の皆様、本当にありがとうございました。